

圖說俳句大歲時記 春



春

圖說俳句大歲時記 春

角川書店版



春 記 時 大 句 俳 説 図

昭和 39 年 4 月 20 日 初版発行

定価 ~~3800~~ 円

編 者 角 川 書 店

発 行 者 角 川 源 義

写真製版所 株式会社 高木写真製版所

本文印刷所 中 光 印 刷 株 式 会 社

製 本 所 株式会社 鈴 木 製 本 所

発行所 株式会社 ^{かど} 角 ^{かわ} 川 ^{しよ} 書 ^{てん} 店

東京都千代田区富士見町 2 の 7
電話 九段 (261) 0111 (代表)
振替口座東京 195208 番

© 1964 Printed in Japan

落丁・乱丁本はお取り替えます

季節の声 No. 1

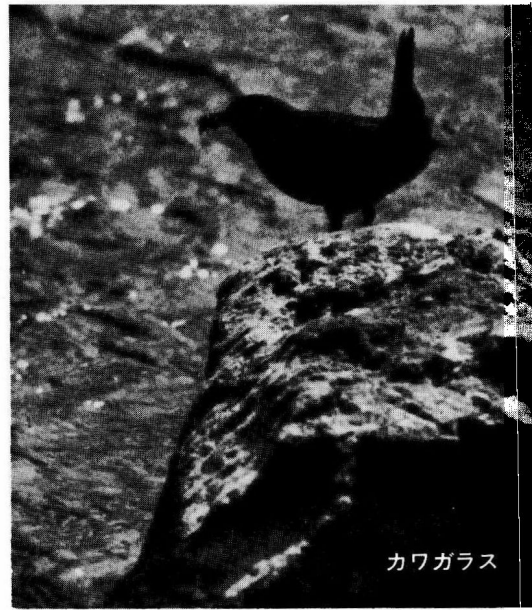
野鳥 監修 解説 中西悟堂



カワラヒロ



オオルリ



カワガラス



ウグイス



ウソ



ヒバリ



ホトトリ



ホトトリ



ホトトリ

鳥の歌

囀りと鳥の鳴き声は「囀り」と「地鳴き」に分けられる。「地鳴き」は一年中、仲間同志で使う種々の「合図」(signal call)である。それは威嚇・警戒・恐怖の声、つぶやき・呼び声、訴えの声、からかいの声などであり、また雌は地鳴きだけで囀りはない。雄も秋冬はすべて地鳴きとなる。鶯の「笹鳴き」などがそれである。

歌の五つの型 「囀り」は春から夏にかけての繁殖期だけに雄のみが歌う「歌」(song)であって、長短、精粗、さまざまである。そして種類によって次のような型に分類される。

- (1) 同音反覆型 同じ音をつづける怪鳥・藪雨・鵲など、また同じ音でも間を区切って反覆する筒鳥・青葉木菟など。
- (2) 異音結合型 異なる音を結んで一つの句とする郭公・十一・四十雀・目白・青鳩など。
- (3) 単一歌節型 同音や異音の組合わせに抑揚や長短の節をつけて修飾する時鳥・赤腹・雉鳩・類白など。
- (4) 異句交唱型 異なった句を交互にくり返すが、それには多くの替え句を混せて、これを長く鳴きつづける大藪切・日雀・河原鵲など。
- (5) 異歌交唱型 以上の(1)～(3)型によって組立てたいくつもの替え歌を次々に歌うもの。このような分類は鳥の歌に科学的な録を入れた京都大学名誉教授川村多実二氏や、Harrison氏の説である。

異歌交唱 以上述べたもののうち(5)の異歌交唱型は最も音楽的なもの場合のといえよう。この型に属するものに大瑠璃・小瑠璃・鶯・駒鳥・黒鵲などがある。たとえば鶯には、ヒーホケキョ(上げ音)、ホーホケキョ(中音)、ホロホロホロホケキョ(下げ音)のいわゆる三つ音があつて、これを交互に歌いつづける。大瑠璃もヒーヒーヒーとか、ビビア、ビビアとか、その他複雑な替え句を重ねて替え歌とする。また小瑠璃はピーチヨ、ピーチヨ、チベチベチベ、チチカララララ、チチヨエ、チチヨエ、ピーチチチチなど十数個の替え歌をつくって交互に歌いつづける。駒鳥にもヒーンヒョーヒョーヒョー、ヒーンサイサイサイ、キーンキョーキョーキョー、ヒーンシーカシーカシーカ、ヒーンチカチカチカ、ヒーンキシキシキシなどの歌がある。

古来、鶯・駒鳥・大瑠璃の三鳥をわが国の三鳴鳥とたたえてきたのも、その複雑な美声を賞でたものであろう。日本人は音楽家の鋭い耳をもしのご感覚をもって、鶯の歌の東洋的な優雅さを聞き分けていたのである。

野山の歌 春の季語にはいつている鳥のうち、雲雀は平野、小縹鶏手たちと河原鵲は平野から山麓の村落ないし丘陵性の低い山地類白・鵲・山椒喰は平野から山林へかけて歌がきかれる。また鶯は海岸を主とするが、時に河川の上流地方の山地でもきかれる。

藪雨・仙台虫食、啄木鳥は低山の鳥で、特に藪雨と鵲は低山の谷合いに多い。藪雨のシシシシシという低声(実は高いサイクル)はよほど熟練せぬときのがしやすが、鵲の一鳴き八、九秒もつづく超大声は谷にひびきわたっている。河鳥は峡谷を離れぬ溪流の鳥で、その囀りはまだ山林に雪のある二月ごろが最盛鳴期、また鵲も一般の小鳥よりは早く三月が鳴き盛りである。

啄木鳥のうち、大型の青啄木鳥はビョー、ビョーと一声ずつ区切った大声、中型の赤啄木鳥はキョツ、キョツと鳴き、小型の小啄木鳥は低声でギーと鳴く。三種とも嘴で釣瓶うちに樹洞を打って、タラララという打撃音(Tatooing)をひびかすが、これは春さきの雌を誘うデイスブレイにも、居所を知らせる合図にもなる。その声はまだ芽ぶかぬ三月、わずかにマンサクの黄色い花が散見される静かな山道を、いっそう幽寂なおもむきにする。

鶯・雉子・鵲は高原、裾野に多い。南軽井沢地蔵が原、群馬県野反湖畔や大原高原、富士南面などは鶯のきき場所である。鶯だけは低山から三〇〇〇メートル級の高山までいる垂直分布の大きいものである。

山鳥と鷹は深山のものだが、山鳥は鳴くことはなく、その代わりに翼でホロを打ち、鷹には種類は多いが、いずれもキーツとか、ケツケツとかの鋭く短い鳴き方が多い。

以上のほか、夏の季語にはいつている大瑠璃と黄鵲は、仙台虫食藪雨とともに、四月半ばにはすでに渡来する。たとえば東京付近なら奥多摩一帯、関西なら比叡山や大台が原、というようにいたるところの低地帯で鳴く代表的な名歌手なので、春のソノシートに入れたが、もちろん夏まで鳴きつづける。

菊戴と鶯は標高二〇〇〇メートル以上の亜高山帯のシラベ、コメツガの針葉樹林に巣を作つて鳴く。秋冬、山麓に下るが、春、ふたたびそうした高所に登る前に、低山、山麓の村落でも鳴くので、声の愛らしい鶯のほうを春のソノシートに加えた。

これらのほか、一括して秋の季語となつている四十雀、山雀・日雀・小雀・柄長などのいわゆる雀類はすべて山麓から低山上部へかけて春囀るものだが、秋に入られてあるのは、春夏の繁殖期が過ぎた秋から一団の混群となつて枝移りをする姿がひとしお目だつからである。

中西 悟堂



白魚舟 (島田謹介)



ヤブサメ



ツル



コマドリ



ウズラ



センダイムシクイ



ウソ



アカゲラ



モズ



コジュケイ



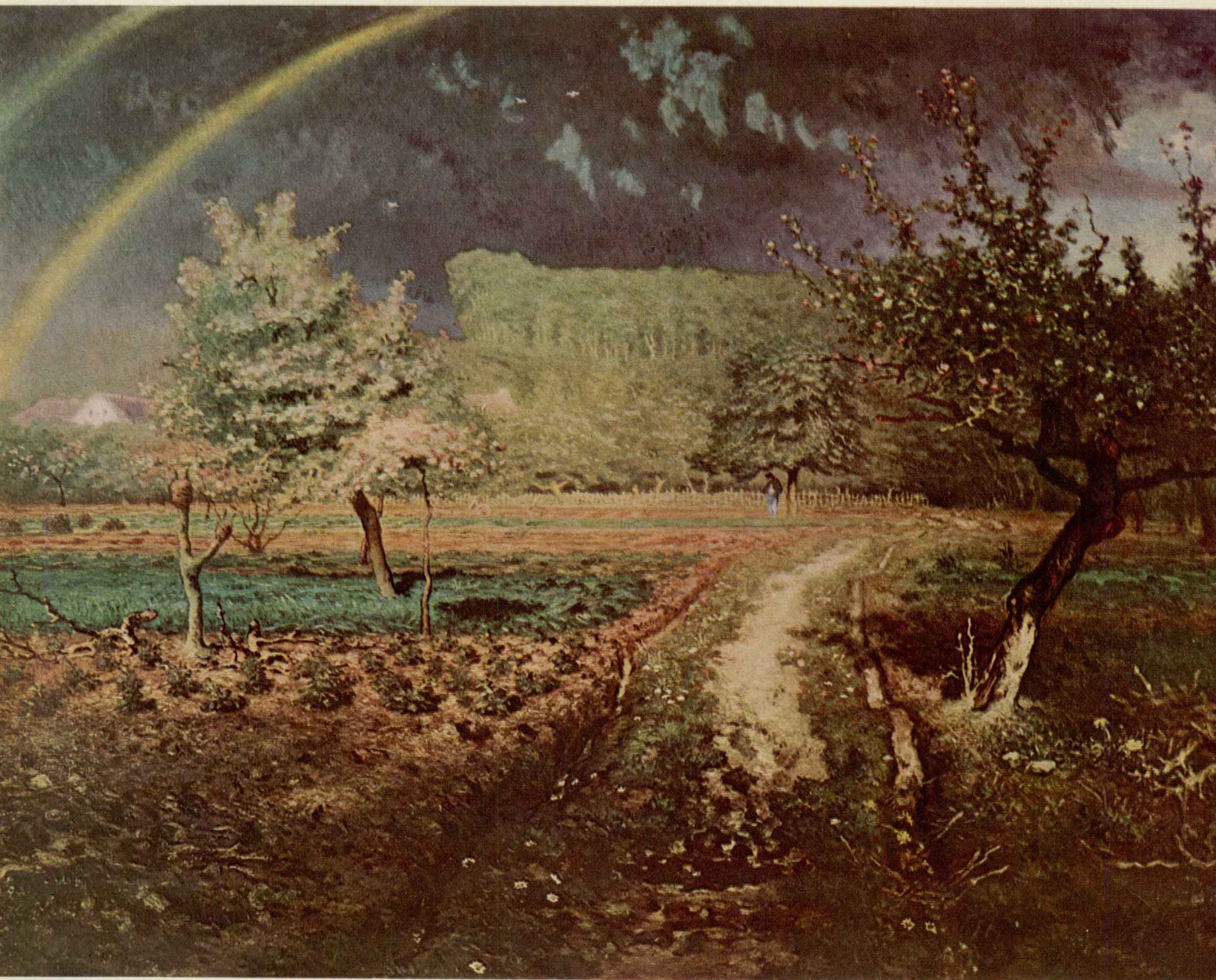
ヒバリ



ホオジロ

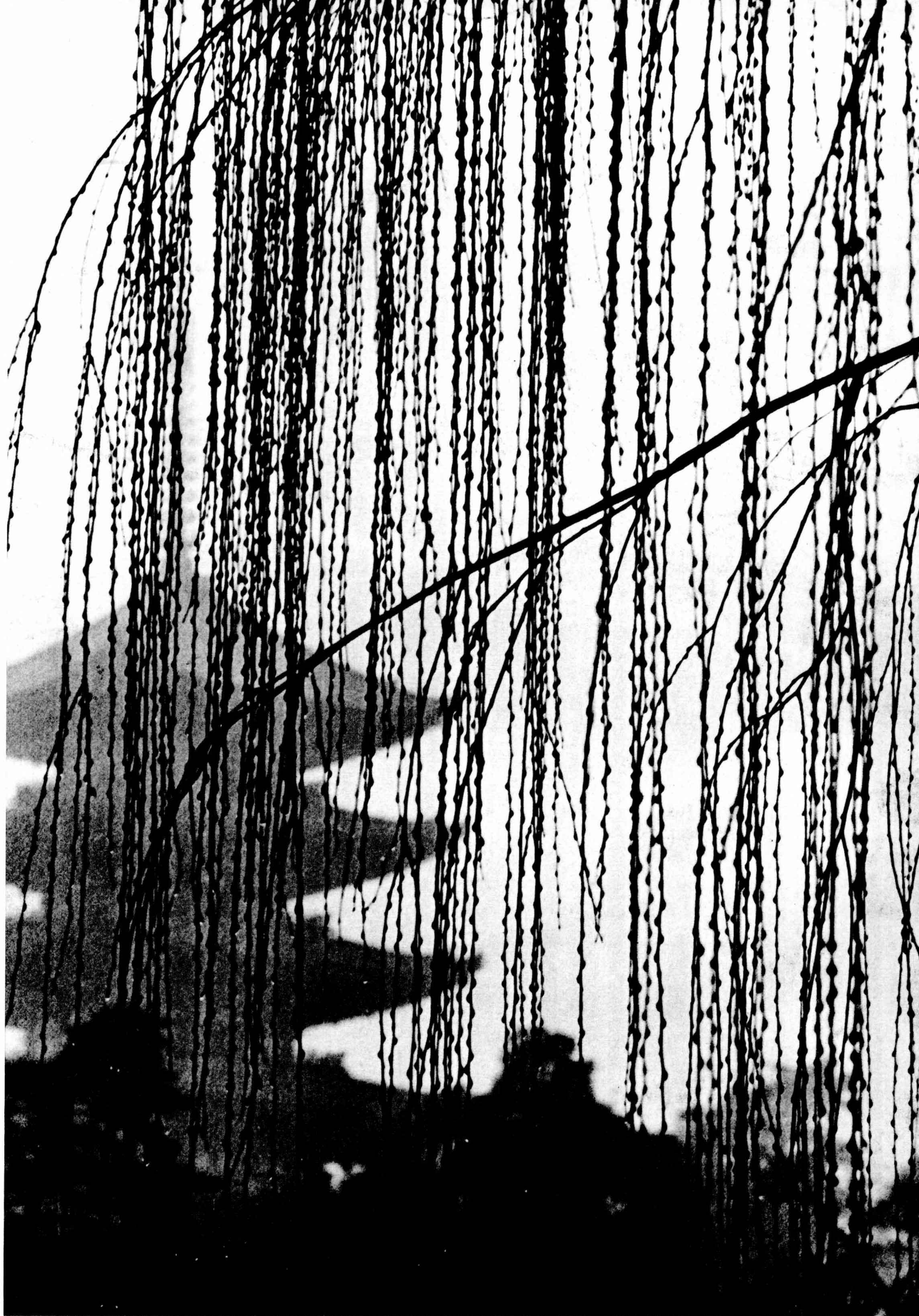


ウグイス



春 (ジャン・フランソワ・ミレー)





木の芽の簾 (奈良興福寺付近)

山菜模様 (越後湯沢)

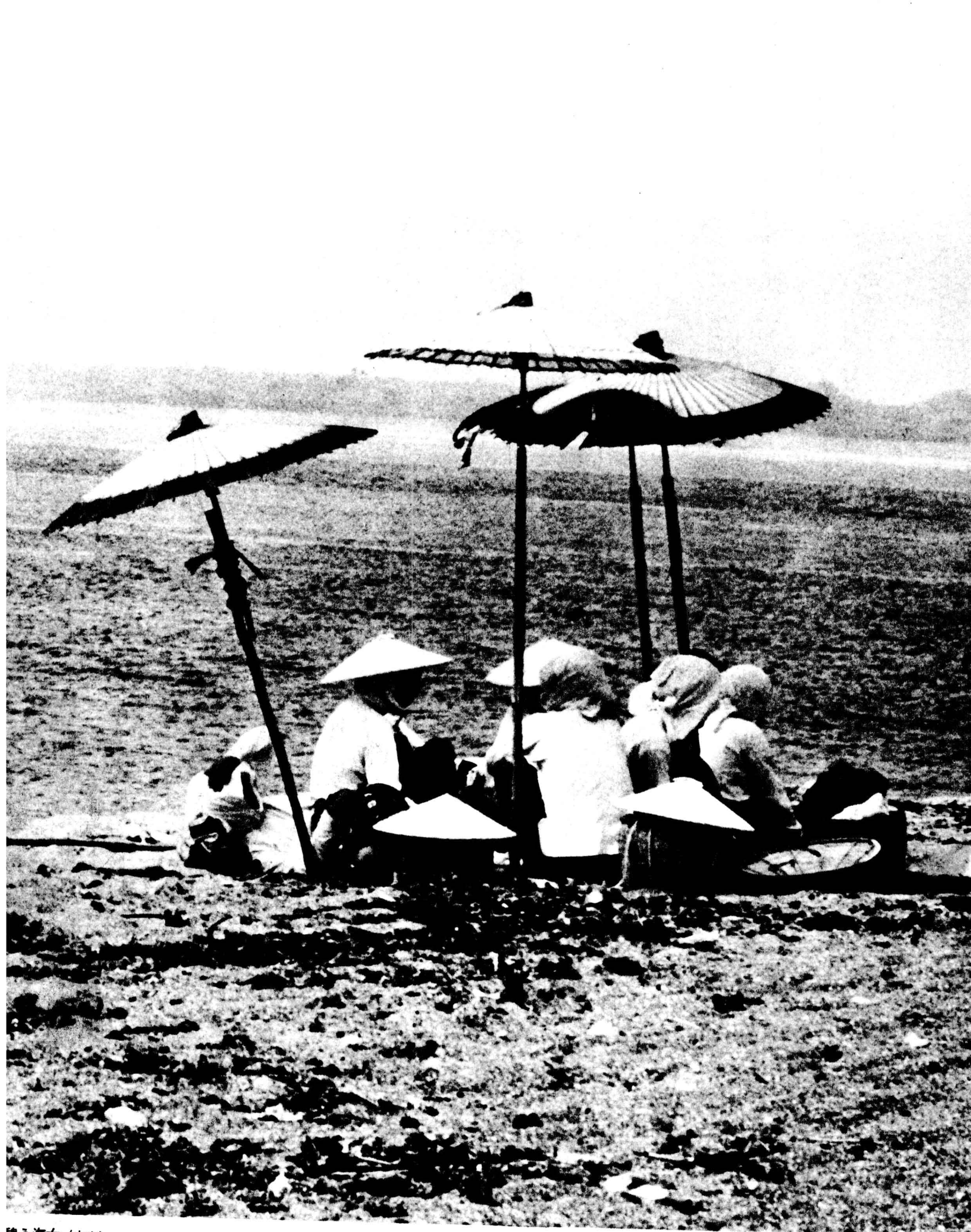








長閑潮騒
(北海道日高)



憩う海女（志摩）

